

II 組織の取組

1 過年度の取組

本校では、平成 27 年度土曜授業推進事業の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校においては担当課や部活動単位において、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の総合的な学習の時間に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、総合的な学習の時間に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、総合的な学習の時間に加え、開校土曜日の 2 時間を使って年次進行で三崎おこしに取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知ってもらうとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができている。

さらに、平成 28 年度より本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として外部講師を招き、「伊方町移住・定住促進協議会」に共催、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただいて、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

令和元年度から令和 3 年度においては、文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」指定を受け、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。初年度は、8 団体にコンソーシアムの参加してもらっていたが、令和 3 年度には 12 団体に参加してもらっており、より多くの人に本校の活動に関わってもらうことができた。

上記のように、本校が本事業採択前より取り組んできた地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有されたと同時に、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

2 コンソーシアム

(1) 概要

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」で構築された三崎高校のコンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくことによつて、教育活動の充実に結び付いている。同事業終了後も、コンソーシアムは継続し、今年度は、大正大学、株式会社 Prima Pinguino、伊予銀行の3団体に新たにコンソーシアムに加わっていただいた。

コンソーシアムは立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等が挙げられる。また、コンソーシアム関係者にも各教科の授業や課題研究活動の講師として招くことで、生きた組織として活動していくとともに、三崎高校の教育目標を共有した上で、豊かな学びの土壌を醸成することができるコンソーシアムの編成を目指して活動した。

本年度は9月と2月の2回開催し、これまで築いてきた協力体制を再確認できた。また、本校の特色である地域とつながる地域連携授業や、地域を軸とした教科等横断型授業の推進のため、「総合的な探究の時間」や「未咲輝（みさき）学」を中心に学習活動にも積極的ににも参加してもらった。今年度からは年に2回の会合に加え、オンラインを利用して定期的な情報共有を図ることで、スムーズな連携を行うことができた。今後は、学校外での活動では、地域行事やインターシップなど、地域探究活動における生徒の受け入れをコンソーシアム関係者に依頼する計画をしている。

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

所属	氏名	主な実績
大正大学	浦崎 太郎	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」企画評価会議 座長
株式会社 Prima Pinguino	藤岡 慎二	総務省地域力創造アドバイザー 産業能率大学経営学部 教授
株式会社伊予銀行	松岡 建夫	金融教育講演会講師
愛媛大学	笠松 浩樹	「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」コンソーシアム構成団体
専修大学	大崎 恒次	
一般社団法人佐田岬Sプロジェクト	宇都宮 圭	
NPO 法人さだみさき夢希会	田村 義孝	
NPO 法人二名津わが家亭	増田 克仁	
佐田岬みつけ隊	黒川 信義	
伊方町役場総合政策課	宮本 廉	
伊方町教育委員会委事務局	三好 要	
一般社団法人 E.C オーシャンズ	岩田 功次	
MIGACT	濱田 規史	
愛媛県教育委員会高校教育課	川本 昌宏	
公営塾未咲輝（みさき）塾	神宮 一樹	

(2) 第1回コンソーシアム

ア 期日 令和4年9月20日（火）

イ 参加者

浦崎 太郎氏（大正大学）、笠松 浩樹氏（愛媛大学）、
藤岡 慎二氏（Prima Pinguino）（オンライン）、
岡田 妙氏（Prima Pinguino）、
松岡 建夫氏（伊予銀行）、大崎 恒次氏（専修大学）（オンライン）、
宇都宮 圭氏（佐田岬Sプロジェクト）、田村 義孝氏（さだみさき夢希会）、
増田 克仁氏（二名津わが家亭）、黒川 信義氏（佐田岬みつけ隊）、
宮本 廉氏（伊方町役場）、寺坂 哲郎氏（伊方町役場）、
三好 要氏（伊方町役場）、岩田 功次氏（E.C オーシャンズ）、
濱田 規史氏（MIGACT）、川本 昌宏高校教育課長、近藤 啓司指導主事、
神宮 一樹未咲輝塾塾長、和田 俊之校長、中西 薫教頭、
二宮 忠事務長、津田 一幸地域協働課長、河野 雄太地域協働課員、
日浅 理香地域協働課員、石本 冴コーディネーター

ウ 開会行事

（校長挨拶）

平成31年度より3年間地域と協働による高等学校教育改革推進事業を行ってきた。また、今年度からは文部科学省より指定を受け、新時代に対応した高等学校改革推進事業、普通科改革支援事業を3年間行うこととなっている。令和6年度より仮称ではあるが、地域社会学科を開設し、新しい三崎高

校を作っていく。また、3つの目標を掲げて取り組んでいく。今年度からは学校の教員だけではなく、地域魅力化コーディネーターを設置し、伊方町の活性化、三崎高校の魅力化を進めていく。多くの意見を取り入れ、より良いものとしていきたいと思っているので、御指導・御助言いただきたい。

エ 本事業の概要説明と生徒活動報告

【概要説明】

(津田教諭)

三崎高校で地域との協働活動を始めて8年目。三崎高校せんたんプロジェクトという名前で行っている。地域との協働活動を始めたきっかけを説明する。三崎高校を卒業後、県外、町外に出ていく生徒が多くなっていた。それを解決するために、地域の魅力づくりと地域に戻ってきてもらえるような生徒育成をしていきたいと考えているようになった。

これまでの取組では、総合的な探究の時間に6つの班に分け研究を行っている。今年度は自分のプロジェクトを探究する「マイプロ班」を加えて取り組んでいる。また、6つの研究班のリーダーの集まりを「せんたん部」とし、横のつながりをもてるようにしている。机上に用意させていただいたマーマレードは本校の生徒が地元の企業2社と連携して、商品化に向けてできたものである。販売方法は検討中である。さき織は専修大学の学生と協力してよりよいものになるように研究を行っている。このように地域の方やNPO団体の方との協働でさまざまな取組ができています。

これまでの成果と課題について、進学ではこれまでの活動に積極的に取り組んだ生徒が旧AO入試や推薦入試を活用して進路実現をしている。このような生徒から「伊方町に帰ってきたい」という声も聞いている。就職では、地域協働の取組が始まり、地元に戻って就職する割合が高まっており、地元を大切にしたいという思いをもった生徒を育てることができていると思う。課題として、大学卒業後の進路を共有できず、連絡が途絶えてしまうことが挙げられる。何か御意見があれば伺いたい。新たな課題として、「活動が多岐にわたっているため、専門性が高く教員だけでは賄えない」、「他校でも実現しやすい普遍性のある取組等、再現性を高める必要がある」、「特色ある学校との比較」が挙げられる。

新事業のポイントとして、みさこうSTEAM教育を進めていくために、世の中の複雑な事象をつないで学びを活性化させる新たな取組の方法について御意見をいただきたい。また、地域特別講師データベース作成について、教員の異動があったとしても新しい先生が地域の人材を使いやすいようにするためにはどうすれば良いのか、方法等検討していただきたい。

学校と地域のこれからの関係について、地域との協働活動では教員がいなると見れないことから教員の多忙化につながっている。少しでも負担を軽減できるような仕組みづくりが必要。「学校が依頼をして受ける」、また、「学校に依頼がきて受ける」ではなく、互いに資源を持ち寄って一緒に企画や運営を行う、横のつながりを作っていくことが必要。

最後に、結局新事業で何をしたいかという、「学校を核とした地域づくり」をベースとして、「生徒が楽しい」、「輝ける」、「やりたいことをやれる」学校づくりをカリキュラム編成で作っていきたい。新しい学校づくりに取り組み、他校の参考になるようにしていく。さまざまな御意見をいただ

きたい。

オ 質疑応答

(田村氏)

卒業した生徒の後追いのために、コロナ禍によってオンラインがかなり進んでいる。それを活用したらどうか。例えば、スラックというアプリケーションを使い、プロジェクトごとに議論をおこなったり、LINE のオープンチャットで情報共有をしたりするなど、みんなが集まりやすく議論しやすい環境を作る。また、卒業生の参加により、社会で学んだことを母校に還元できるような仕組みを整えられないか。

(濱田氏)

卒業後のつながりは大切である。そのために、地域のコミュニティをオンライン上に作るのはどうか。コロナ禍でより身近になってきた。愛媛県では、EX の推進が行われている。県庁ではエールラボ愛媛という地域のコミュニティづくりのサービスを行っているので、それを活用してはどうか。

(増田氏)

心同士のふれあいのために、高校生が地域の中にもっと踏み込んできてほしい。地域の人には高校の取組を知らないのが、どのように関わったらよいかわからない人も多いと思う。三崎高校で行われているみさこうカフェを古民家で行ったが、普段閑散としている地域が一気に活性化し、とても良かった。このような取組を他地域にも還元して行っていくと良いのではないか。

(教頭)

コロナ禍でみさこうカフェができていないが、ぜひこれからも地域に出て行って、みさこうカフェを開き、地域と協力していきたい。

(黒川)

三崎高校は伊方町の高校であるので、旧伊方町や瀬戸町にも名を売るような取組をしていく必要があるのではないか。伊方町在住の方は高校生を見ても三崎高校の生徒ではなく、川之石高校の生徒かと思うことが多い。高校生を見て三崎高校の生徒だなと思えるような何かがあれば良いと思う。

新しい時代に対応した高等学校について、全員に対してか、ある特定のグループに対してなのか、対象がわからない。個人の能力を高めていくことをやっていけたらと思う。

学校を核とした地域づくりを目指すところがあるが、小中高で行う内容が一貫していない。同じことを繰り返すのは少し違う気がするので、その点を改善していただきたい。

地域資源の活用について、地域に他にないものとして、海に突き出した佐田岬半島、インフラ、動植物など、ジオパークの理念としてわかりやすい場である。学校の教科の中に取り入れられることがあればお願いしたい。

(教頭)

伊方町全てで協力してもらえるようにしていきたい。

(黒川)

やらなければならないことはわかっていると思うが、それを実現するために具体的にどのように展開してくのか、移動の足はどうするのかなど、地域の人と話し合っ具体的案を提案して行ってほしい。

(教頭)

学校の教職員で話し合っ、みつけたやり方を第2回のコンソーシアムの時に提案できるようにしたり、教えていただきたい。

学校を核とした地域づくりについて、高校と地域との協働を小中学校とも一緒に行っていくことで、地元の子どもたちも三崎高校にきてくれるのではないか。また、地域資源の活用については宇都宮さんの協力のもと「佐田岬プロジェクト」に関わっている。

(宇都宮)

佐田岬灯台を使った地域活性化を今年度から2年間行う。日本財団の協力のもと、海と日本プロジェクトに取り組んでいる。灯台のある町を使った地域活性化を調査研究し、来年度実施していく予定である。伊方町では、伊方町にある10の灯台をどうにかして生かせないかと考えている。その取組を三崎高校のカフェ班や釣り人に協力を仰いで、町を盛り上げていこうと予定している。

(教頭)

本校の生徒も協力をさせてもらって、地域の活性化に役立つような取組を行っていききたい。それが生徒の成長にもつながっていくと思う。

(藤岡)

やる視点とやめる視点を持ち、取捨選択をしていくことが必要。そのために、自分たちの方向性や軸を決めていくことも重要である。

(教頭)

やれることとやめることを検討していきたい。皆さんからいただいた意見についても全てできるわけではないので、意見として取り入れて、取捨選択していきたい。

(岩田)

佐田岬らしいところである自然を取り入れてほしい。自然工学やアート、環境保全(数学)など。

小中高が地域活性化を行っていくなら、先生の教育をしてレベルアップしていくことが必要。自然を学べるような学科を作りたいと考えているので、小中高でも「自然がすき」と思えるようなことを学べる環境や自然を守りたいと思う子どもたちの育成をしていってほしい。

先生方を集めてレクチャーをして、先生方が学んだことを自分の言葉に置き換えて子どもたちに伝えるという仕組みができれば良いと思う。

(教頭)

色々と御意見をいただきありがとうございました。第2回は2、3月に行う予定であるので、また御意見等があればよろしくお願いします。

カ 閉会行事

(校長挨拶)

たくさんの御意見ありがとうございました。三崎高校が取り組んできた情報発信やイベント、特産品の開発、さまざまな活動を総合的な探求の時間と未咲耀学の週2時間で行ってきたが、全てをやりきることができなかった。新事業では授業の中に取り入れ、今までできなかったことや更なる研究ができるようにより多くの時間を使って進めていきたい。本日いただいた意見を参考にして工夫をしていきたい。また、第2回の会議では、このような教育

課程、カリキュラムでやっていくという案を出し、御意見をいただきたいと考えている。学校の中でも協力して進めていきたい。お時間をいただきありがとうございました。

(3) 第2回コンソーシアム

ア 期日 令和5年2月15日(水)

イ 参加者

浦崎 太郎氏(大正大学)、大崎 恒次氏(専修大学)、
宇都宮 圭氏(佐田岬Sプロジェクト)、田村 義孝氏(さだみさき夢希会)、
増田 克仁氏(二名津わが家亭)、黒川 信義氏(佐田岬みつけ隊)、
菊池 嘉起氏(伊方町役場)、寺坂 哲郎氏(伊方町役場)、
宮本 廉氏(伊方町役場)、三好 要氏(伊方町役場)、
岩田 功次氏(E.Cオーシャンズ)、藤岡 慎二氏(Prima Pinguino)、
跡見 愛美氏(Prima Pinguino)、矢作 圭吾氏(Prima Pinguino)
松岡 建夫氏(伊予銀行)、細川 昌弘主幹、近藤 啓司指導主事、
神宮 一樹未咲輝塾塾長、和田 俊之校長、中西 薫教頭、
二宮 忠事務長、津田 一幸地域協働課長、日浅 理香地域協働課員、
石本 冨コーディネーター

ウ 開会行事

(校長挨拶)

本日は御多用のところ、「令和4年度新時代に対応した高等学校改革推進事業、普通科改革事業、第2回コンソーシアム」に参加していただき、ありがとうございます。

さて、令和6年度に向けて推進事業を進めてきた。変化の激しい社会に生き抜くための人材育成のために、新しい三崎高校の教育課程を各教科主任、各課の先生と相談してきた。

本校だけでは難しい部分は御指導をいただいたり、STEAM教育3校の参観をしたりするなどしてきた。本日はこれまでの成果を説明し、皆様の御助言をいただきたい。

エ .事業内容説明

(津田教諭)

詳しいことは各自で読み、御意見をいただきたい。

これまで地域との連携からさまざまな活動を行ってきた。きっかけは伊方町の少子高齢化、三崎高校に入学生の低下等、地域の担い手不足である。これを機会に地域の課題を高校生の探究活動により、限界集落から持続可能な地域へというテーマのもと始まった。

今年で8年目であり、伊方町の人材を育てるだけでなく、県内外各地からの生徒もいるので新たな視点で取り組んでいる。

これまでの三崎高校のコースはⅠ型とⅡ型で、Ⅱ型は理系と文系に分かれていた。これからは仮称ではあるが「地域探究」、「人文探究」、「科学探究」のコース分けを考えている。今まではⅠ型が就職、Ⅱ型が進学という考え方を、どのコースでも就職、進学できるようにしている。Ⅰ型とⅡ型のラインが曖昧になってきている。その括りを取り除くという意味でも、探究活動を軸にしたコース分けを作成した。

「地域探求」 より地域と密着した活動を行っていく。地元就職や地域系の大学進学。

「人文探究」 地域活動を軸にしながら、人文系や社会学を学ぶ。

「科学探究」 地域活動を軸にしながら、工学、科学を学ぶ。

※名称は全て仮称

このコースにおいて教育課程を考えてきた。考えたものは教育委員会の方にチェックをしていただいて、令和6年度に向けて完成させていく。

もう一つの特徴は、週29単位（6時間の日を4日間、5時間の日を1日間）にし、放課後の時間を有効活用できるように設定したことである。これは、放課後に探究活動や生徒の個人探究、自分の時間等を設定できるようにするためである。学力面の心配をされる方がいる可能性があるが、本校の特徴である公営塾との連携を強化し、最低限の学力は授業で、塾で更なる学力向上をしていく。そして、スタディサプリというオンライン学習ツールの活用も行っていく。

現在の三崎高校の主な取組は、発表のとおり、6つの班で活動を行っている。ブイアート、インスタグラムへの投稿、みさこうカフェ、地域連携避難訓練、マーマレード販売、ツアープラン制作等に取り組んでいる。有志による取組も行っており、出身地関係なく、伊方町の伝統を受け継いでいる。

新たな取組計画としては、3つ考えている。一つ目は、「みさこうゼミ」である。放課後の時間に希望者を対象に大学のゼミのような機会を設けることである。教員がするのではなく、地域人材やオンラインによる外部人材に講師を依頼する。昨年度から佐田岬みつけ隊の地域団体に高校生を加入させてもらっており、学校が関与していない形でフィールドワークを行っている。それをモデルケースに地域の方や大学生等と連携をして行っていきたいと考えている。希望者を募って行うので、生徒の興味に応じで選択できるようにしていく。しかし、生徒から目をどれくらい離すことができるかや保険の問題もあるのが課題である。

二つ目は、「イベントスケジュールワークショップ」である。現在も地域の方からイベントの情報をいただいているが、学校行事や他の行事との兼ね合いで生徒や教員が不足していることがある。年度当初にイベントの年間スケジュールを決定しておくことで、行事参加に余裕を持つことができる。また、三崎高校がハブになることで、他団体からの依頼も受けやすくなる。今年度は、2月23日に1回目を行う予定である。

三つ目は、「jobフェア in みさこう」である。高校2年生と大学2年生を対象に伊方町・八幡浜市の企業を呼び、合同企業説明会を行うものである。現在、大学に行った生徒がどうしているのかを調査できていない。当時の担任が転勤の場合、探ることが難しい現状である。地元の企業のことを知れば就職したい人等、Uターン生が増えるように手を打つためにも実施をしたいと思っている。会の始めには大学生に研究発表を行ってもらうことで、高校生が大学の魅力を知ることができたり、大学との連携につながったりする。また、企業に対してはアピールの場になる。

その他にも「せんたんシンポジウム」の実施も予定している。以前から行っていたせんたんミーティングの進化版である。これまではローカルな視点で行っていたが、立命館アジア太平洋大学の留学生に参加してもらい、グロ

ーバルな視点で交流ができるように、バージョンアップさせていく。

新事業1年目であり、成果はあまりないが、生徒数は増加している。今年度も県外からの見学者も多い状況である。これは地域の方達の協力や地域の方の優しさのおかげでもあり、口コミなどでその良さが広がっているからだといえる。生徒の成果としては、伊方町出身の有無に関わらず、伊方町の魅力を発信したい、より良くしたいという思いを持つ生徒が増えていることである。また、地域の方との触れ合いを通じてコミュニケーション力の増加にもつながっている。

課題としては、新旧の交代による過渡期であり、業務の整理ができていないことがある。また、全国から入学した生徒の卒業後の連携ができていないこともある。これからはシステム化し、オンラインを活用して追っていききたい。

オ 研究協議

(中西教頭)

資料が膨大であるので、じっくりと呼んでいただきたい。

コンソーシアムとは、協力し合う仲間という意味がある。協力していただける方が多くいることに気付くことができた。本会議でお話しいただくだけでなく、これからも追って協力願いたい。

(佐田岬みつけ隊 黒川)

質問①：改革の事業について、一般には知られていないのではと思うが、どうやって知らせていくのか、PR方法を知りたい。

質問②：先生の異動の引き継ぎをどのようにしていくか。スムーズにいけるようにしていただきたい。

質問③：卒業生との連携をオンラインで行うという話だが、どのように進めていくのか具体的に知りたい。

(和田校長)

質問①：現在、マスコミで公表されている。コースは仮称であるので、教育委員会と決めていきたい。決まったらプレスリリースをする。地域未来留学を通じて知ってもらい、その県外生が口コミで広げていくことでPRをしていきたい。

質問②：コーディネーターと連携をしていく。授業の中で地域の教材を取り入れるので、教科書を軸に地域教材を取り入れていくことで、スムーズにできると思う。

(中西教頭)

質問②：教員の負担にならないように報告書を作っていく。また、Prima Pinguinoの方と協力をして簡単なシステムを使って残せるようにしていきたい。

(津田教諭)

質問③：大崎ゼミの学生と協力して、遠くにいて関われない人と関わる機会を設けるように考えている。具体的な運用方法は決まっていない。

オンライン同窓会については、卒業する段階でメール等で登録を行い、いつでも情報が入るようにする。例えば、町の広報をデータ化して情報発信を行っていく等の取組を行う。

(大崎氏)

質問③：大学に入ってから徐々に関係が希薄になる。大学生になってからも関係を途絶えさせないために、大学1・2年のまだ関係の濃い時期にやっ
ていくことで希薄化を防ぐことができる。現在、大崎ゼミでは、社会人基礎
力を身につけることに取り組んでいる。アポイントメントやメールのやり取
りを練習して実践できるようにすることやマーケティングで大学生の学び
を生かして高校生と連携する等が考えられる。現在は試行錯誤中である。

(石本コーディネーター)

質問③：オンラインの補足であるが、花橘会をデータ化し、メーリングリ
ストにしようとしている。花橘会を HP や Facebook で発信し、メー
リングリスト化に取り組んでいきたい。

(増田氏)

意見①：三崎高校のプロジェクトで商品開発班の BBQ ソースと万能型ソ
ースが印象に残っており、それをジビエの方と協力をして行うこと
もよいのではないか。カフェ班は伊方町各所で行ってほしい。ツア
ー班の地蔵班については、ミニ四国 88 ヶ所に興味を持っており、
同じ志を持っているので連携したい。

これからはわがや家での民泊やイベント、ジビエ料理の発表会など、高校
生が街中にもっと入ってほしい。

(松岡氏)

意見②：三崎高校でも企業セミナー、金融教育セミナーを行ってきた。し
かし、学校行事との兼ね合いで、積極的にできなかった。イベントスケジ
ュールワークショップを活用して金融教育やセミナーも入れていきたい。

意見③：伊方町の博物館ができる。高校と博物館がタッグを組んで、何か
のイベントを開催するのもよいのではないか。

(津田教諭)

意見②：ワークショップの開催で行ってきたい。

意見③：三崎高校3名がミュージアムガイド養成講座に参加している。物
販はどういう施設ができるかがわからないので、何か連携をしてい
きたい。

(黒川氏)

意見③：ミュージアムショップがあるので、何かできるのではないか。ま
た、地域活動の部屋を三崎高校に使っていただくのもよいと考えて
いる。

(中西教頭)

高校生を活用していただけることをありがたく思っている。

(岩田氏)

意見：現在、海ごみ問題の活動を行っている。愛南町で25日間のゴミ拾
いを行った南宇和高校、愛媛大学の学生、愛媛大学附属高校の生徒と行った。
伊方町の二名津港の恋の浜(こいのはま)でゴミ拾いを行う計画を立ててい
る。4月14~17日の9時から16時である。ゴミ拾いは大人たちが行う。そ
の日程の前後10日間でイベントを行うことも考えている。恋の浜は瀬戸内
海で5本の指に入る程ごみが集まっている場所である。このイベントを通じ

て海ごみ問題を考えるきっかけになってほしい。まずは、大人たちが参加し体験してもらい、それを子どもたちにどのように還元していくのかを考えてほしい。

(中西教頭)

時間となったのでこれで終了としますが、何か御意見がありましたら是非よろしくお願ひしたい。今後も公営塾とも連携をして取り組んでいく。

カ 閉会行事

(校長挨拶)

本日は成果発表から長時間ありがとうございました。

1年間の取組は手探りだった。横道にそれそうなときはみなさんの御協力により正しい道に戻ることができた。魅力のある楽しい夢のある学校づくりを行っていききたい。今後とも協力お願ひしたい。

3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

(1) 職員体制に関する支援

- ア 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
- イ 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

(2) 取組内容に関する支援

- ア 生徒のグローバルな視点の習得支援（未咲輝塾によるトビタテ！留学 JAPAN 応募にいたる指導）
- イ 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加支援）
- ウ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達
- エ 伊方町による本校地域連携探究活動（せんたん新聞、せんたん book 制作）印刷物制作費用全額補助
- オ 一般社団法人佐田岬Sプロジェクトによるブイアートプロジェクトにおける活動支援
- カ NPO法人さだみさき夢希会による「みっちゃん大福」の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援
- キ 愛媛大学による「アサギマダラ」の研究（地域資源活用プログラム）及び合同ダンス制作（情報発信）、エネルギー教育事業（課題解決カリキュラムの開発）における活動支援
- ク 専修大学による総合的な探究の時間における活動支援
- ケ 佐田岬みつけ隊による歴史や文化を中心とした地域研究活動（地域資源活用プログラム）における活動支援
- コ NPO法人二名津わが家亭による地域活動拠点の提供
- サ 株式会社伊予銀行による企業教育支援

(3) 成果普及のための支援

えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月31日、発表と意見交換）発表校、パネルディスカッションパネリストとして参加

(4) 運営に関する支援

ア 運営指導委員会の開催

年2回実施（9月20日、2月15日）

イ コンソーシアムの開催

年2回実施（9月20日、2月15日）

ウ えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（発表と意見交換）1月31日実施

